

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2006～2009

課題番号：18320032

研究課題名 (和文) 古代ローマにおける弁論術の形成と発展

研究課題名 (英文) Formation of the ancient Roman rhetoric and its development

研究代表者

渡辺 浩司 (WATANABE KOJI)

大阪大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：50263182

研究成果の概要 (和文)：キケロ、クインティリアヌスといった古代ローマの弁論家は、弁論術の学的な根拠を追求するわけではなく、学的な根拠は古代ギリシアのアリストテレスによって作られた弁論術を継承している。18 世紀になると弁論術の学的な根拠はバウムガルテンによって書きかえられた。現代におけるレトリック復興は、古代の弁論術を継承するものではなく、古代の弁論術への誤解と「認識がレトリカルだ」とする現代の考え方とによる。

研究成果の概要 (英文)：Roman rhetoricians, such as Cicero and Quintilianus, inherited the theory of rhetoric which was founded by Aristotle' "Rhetorica". In the 18<sup>th</sup>, Baumgarten reformed the Aristotelian theory of rhetoric with the result that Greek and Roman rhetoric was absorbed into aesthetics. In 20<sup>th</sup>, rhetorical renaissance is not caused by the new understanding of Greek and Roman rhetoric, but by the modern understanding of human thinking, that is to say, the modern thought that thinking is rhetorical.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2007 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	5,400,000	1,620,000	7,020,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：弁論術、レトリック、修辞学、詩学、プラトン、アリストテレス、キケロ、クインティリアヌス

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 古代ギリシア・ローマの弁論術は、日本においてこれまで部分的ないし皮相的にしか言及されることがなかった。古代ギリシア・ローマの弁論術について日本語で書かれ

た書物はほとんどなかった。現在入手できる書物としては、浅野檣英『論証のレトリック：古代ギリシアの言論の技術』があげられるだけである。

(2) 『キケロー選集』、クインティリアヌス『弁

論家の教育 1』など、古代ローマの弁論術書は数点邦訳されているが、たとえば『キケロー選集』には、『ブルトゥス』や『トピカ』などが集録されておらず、またクインティリアヌスの『弁論家の教育』も全体の6分1しか邦訳されていなかった。

(3)以上のように研究においても邦訳・紹介においても、古代弁論術、特に古代ローマの弁論術に関してはまだ充分とは言い難かった。

## 2. 研究の目的

(1) 歴史的な側面と理論的な側面から、古代ローマの弁論術がどのように形成されたのか、また後世にどのような影響を与えたのか、という二点について全体的な展望を与えることを主たる目的とした。

(2)歴史的な側面としては、『ヘレンニウスに宛てた弁論術』やキケローの『ブルトゥス』『トピカ』、クインティリアヌス『弁論家の教育』という具体的な弁論術書にしぼり、個々の弁論術書を読解・邦訳することを第一とし、当該弁論術書が書かれた時代背景、影響関係を明らかにすることを第二とした。海外における弁論術の研究は、キケローやクインティリアヌスの弁論術書の近代語訳・出版という段階を終えており、個別的なテーマが研究の中心に移行している。古代ローマの弁論術書を邦訳・読解することで、日本における古代弁論術の基礎を築くという点で今回の研究はきわめて有益である。

(3)理論的な側面としては、古代ローマの弁論術が形成されるにあたって、その理論的な背景を明らかにすることを第一の目標とし、古代ローマの弁論術を支えた理論が後世どこで変容したのかを明らかにすることを第二の目標とした。とくに偽キケローの弁論術書である『ヘレンニウスに宛てた弁論術』を読解し、古代ローマの弁論術の理論的な基礎を解明する。

(4)美学・芸術学の理論においても古代弁論術の理論がはたした役割は大きい。近現代の美学・芸術学における古代弁論術の影響を、近現代のレトリック論、美学理論、芸術学理論という具体的な理論にしぼり明らかにすることを目標とした。

(5)以上により、古代ローマにおける弁論術の形成と後代におけるその影響とを、歴史的な観点からも理論的な観点からも研究することで、古代ローマの弁論術の実際について俯瞰的な展望を与えることを目標とする。

## 3. 研究の方法

(1)研究は、弁論術書、美学理論書などの邦訳、読解による。

(2)そのさい、研究代表者、研究分担者、連携研究者、研究協力者の一人一人が個別に研

究を行うのはもちろんであるが、一人一人の個別の研究とは別に、「弁論術研究会」を組織し、研究会での研究発表・共同討議という研究会方式をも採用した。

(3)交付期間中の個々人の研究分野の担当を記すと以下のとおりである。

①古代班：渡辺浩司（研究代表者）、森谷宇一（研究協力者）、戸高和弘（研究協力者）、吉田俊一郎（研究協力者）。

②近現代班：伊達立晶（研究分担者）、田之頭一知（連携協力者）、石黒義昭（研究協力者）、菊池あずさ（研究協力者）。

③両班の調整：渡辺浩司（研究代表者）、伊達立晶（研究分担者）、森谷宇一（研究協力者）

(4)上記のように交付期間中に年2回の割合で研究会（弁論術研究会）を開催した。「弁論術研究会」の記録は以下のとおりである。

①第1回、2007年8月4日、大阪大学  
提題者：渡辺浩司、テーマ：エンテューメーラ（説得推論）

②第2回、2007年12月15日、大阪大学  
提題者：吉田俊一郎、テーマ：クインティリアヌスにおけるエートスとパトス

③第3回、2008年8月9日、大阪大学  
提題者：戸高和弘、テーマ：文芸における崇高さとは何か—伝ロンギノス『崇高について』より

④第4回、2008年11月2日、大阪大学  
提題者：萩原康一郎、テーマ：現代のレトリック論

提題者：伊達立晶、テーマ：プラトンの弁論術書『パイドロス』—文字文化との対決

⑤第5回、2009年8月29日、同志社大学  
提題者：渡辺浩司、テーマ：キケロー『トピカ』について

⑥第6回、2010年1月23日、大阪大学  
提題者：石黒義昭、テーマ：美的経験について

提題者：田之頭一知、テーマ：兼常清佐の「ピアノリスト無用論」—その音楽批評のあり方をめぐって

## 4. 研究成果

(1)古代ローマにおける弁論術の形成と発展について、まず歴史的な展観からの研究成果に記す。

①弁論術にとっても弁論自体にとっても古代ローマは、古代ギリシアにつぐ第二の母郷である。ローマで弁論がさかんであったこと背景としては、少なくとも三つのことが挙げられる。第一は、弁論のための政治的ならびに社会的な条件がそなわっていたということである。すなわち少なくとも共和制期においては弁論の三種類のうちで、元老院と民会が審議弁論の場となり、いわゆるローマ法と結びついた裁判制度は法廷弁論の場を提

供していた。第二に、弁論というものに対するローマ人の適性であって、ローマ人はギリシア人以上に行動の人であるとともに、ギリシア人におとらず言論の人であったといえよう。そして第三には、弁論にとってのラテン語の特性であって、ラテン語はその響きと諧調とにおいてギリシア語におとらず弁論に向いていた。

②しかしローマ人は長いあいだ弁論の理論、すなわち弁論術とは無縁であって、彼らにそれをもたらしたのもギリシア人であった。第二次ポエニ戦争をへて前2世紀、圧倒的な勢いでギリシア文化がローマへ流入するなかで、多くのギリシア語(人)弁論術教師がローマへ来訪ないし移住し、学校を開いてローマ人にギリシア語で弁論術を教えるようになった。このような趨勢に少し遅れてではあるが、ローマにはやがてラテン語弁論術教師なるものも生まれ、彼らは同様に学校を開いて人々にラテン語で弁論術を教授するようになった。

③それにともなって前1世紀初めには、ラテン語で書かれた弁論術書も出現することになった。そのようなものとして現存している一つが、古くはキケロの名に帰せられていたが実は作者不明の『ヘレンニウスへ』である。これは、弁論術の体系のほぼ全体をカバーするとともに相当な分量を有している著作であって、以下に挙げるキケロの第一の著作とならんで、中世からルネサンス期にかけて最も広く読まれた弁論術書である。ただしその実質は、法廷弁論における「争点(status)」に関する教説をはじめとして、ヘレニズム期のギリシアの弁論術、特にヘルマゴラスのそれをほとんどそのまま敷き写したものにすぎず、独自性には欠ける。

④ローマの弁論術の歴史において第一人者たるは、もちろんキケロである。キケロが遺した弁論術書は、二つのグループに分けられる。一つは、弁論術の体系や規則をとりあつかったものであって、彼の若年に書かれた『発見について』に代表される。それらの著作を通じての彼の最大の功績は、哲学の領域におけると同様に弁論術の領域においても、ギリシア語の術語をラテン語に置き換える上で模範的な役割をはたしたという点にある。しかしそれらは内容的には、先行するギリシアの弁論術をほとんどそのまま踏襲したものであって、独自性には乏しい。もう一つのグループは、むしろ弁論術の精神、より端的には弁論家の理想像を追求したものであって、『弁論家について』、『ブルトゥス』、『弁論家』という三部作をなす。それらの著作を通じてキケロは、アリストテレス、イソクラテス、ヘルマゴラスなどギリシアの弁論術を吸収しながらも、弁論の実践の重要性を説くとともに、弁論術の体系や規則にとらわ

れることをいまして、まさに弁論術の精神を唱道したのであった。そのような弁論術の精神とは、弁論家は人間的教養において完璧でなければならず、「学識ある弁論家」(『弁論家について』3. 143)ということこそ弁論家の理想像であるとするものであった。こうしてキケロは、ギリシアに起源を有する弁論術というものをはじめてローマ化しようとしたのである。

⑤しかるにローマが共和制から帝政へ移行するのにともなって、弁論自体が大きく変容する。審議弁論はもはやおこなわれなくなり、法廷弁論も卑小なものへと墮していき、かわりに盛んになったのが、弁論のうちの declamatio (模擬弁論) である。これは、すでにさかんにおこなわれていたヘレニズム時代のギリシアから移入されたものにほかならないが、この declamatio は、実生活から遊離した空疎な美辞麗句からなる弁論として、演示弁論の性格をも帯びようになっていった。しかも declamatio はギリシアでもローマでも、元来は弁論術学校で練習用におこなわれた弁論であるが、次第にまた弁論術教師自身による公開の弁論として、実際の弁論において大きな比重をしめるようになっていくのである(タキトゥスの『弁論家についての対話』参照)。

⑥共和制から帝政への移行にともなう弁論自体の以上のような変容と軌を一にして、弁論術もその性格を変えることとなった。弁論術は、たしかに帝政期を通じて高等教育における最も重要な要素でありつづけたが、実際には上述のような declamatio のためのものとして、かつて有していたような実践的役割を失い、単に学校で教えられる学科目と化するにいたった。と同時に弁論術の体系のうちでは、発想(inventio)と配列(dispositio)との部門とならんで措辞(elocutio)の部門の比重が増してきた。こうして弁論術は二重の意味で、いわゆるレトリック(修辞学)としての性格を強めることになったのである。

⑦こうしたなかでローマの弁論術のみならず、古代の弁論術全体をまさに集大成したが、クインティリアヌスの『弁論家の教育』である。この著作ほどに完備した体系と多大な分量とを有する弁論術書はほかにない。それは、単に弁論術の体系や規則をとりあつかう弁論術教本(弁論術の技法書)にとどまらず、なによりもまず、弁論家をこそ理想的人間とみなし、そのような人間の教育ということの主眼としている。その意味で本書はギリシアのイソクラテスの思想を受け継ぎながら、より端的に教育論の領域に属しているといえ、実際また後にルネサンス期にはそのようなものとしても広く読まれたのであった。弁論術とは究極的には、「立派に語るための学」(2. 15. 38)と定義されている。

と同時に弁論家に根本的に求められているのは高い倫理性であって、「よき人」(1序9, 12. 1. 1) でなければ完璧な弁論家たりえないと断言されている。また同時代において支配的な declamatio という弁論についてクインティリアヌスは、その効用をひとまず認めながらも、そのいきすぎを批判して、実生活に似たものでなければならぬとしている

(2. 10)。弁論術の体系のうちでは、発想の部門に多くが割かれている。また弁論のうちでは法廷弁論が圧倒的に大きくとりあつかわれており、なかでも「争点」に関する部分(3. 6) は詳細をきわめる。以上にもかかわらずクインティリアヌスのこの著作は、レトリック(修辞学)への傾斜という、先に述べたこの時代の弁論術の傾向を多分に反映している。そして弁論にとって修辞は必須であるという根本前提に立って(8. 3)、特に比喩(tropus)と文彩(figura)が詳しくとりあつかわれている。

⑧いわゆる後期古代のローマにおいても数多くの弁論術教師が輩出したことに変わりはなく、彼らの著作も不十分なが今日に伝えられて残されている。しかしいずれにせよこの時代の弁論術はもはや、それ以前の弁論術に本質的に新しい内容をつけ加えるものではなかった。

(2) 古代ローマにおける弁論術の形成と発展について、理論的な展観からの研究の成果に記す。

①古代ローマ人は弁論の理論には無縁であった。彼らに弁論の理論をもたらしたのはギリシア人であって、古代ローマの弁論術はギリシアの弁論術を多分に継承したものである。したがって、古代ローマの弁論術についてのみの理論的ないし体系的な記述はあまり意味をなさない。

②古代ローマ人が継承した弁論の理論はアリストテレスの『弁論術』の理論である。アリストテレスの師であるプラトンは弁論術を料理術と変わらないものだとして非難した(『ゴルギアス』参照)。弁論術を学問的な対象としないこうしたプラトンの姿勢にたいしてアリストテレスは、「たいていの場合」における推論を確立し、これによって弁論を学問的に扱うことを可能にした。

③アリストテレスの弁論の理論の根幹は「たいていの場合」における推論にある。それは具体的には「説得推論」という弁論術に特有の推論である。説得推論は三段論法などの推論と同様に大前提を一つ持つが、その大前提は厳密に真であるものでなく、われわれが常識としている思惑である。たとえば「神々ですら一切を知らないのであれば、人間がすべてを知ることなどほとんど不可能である。『弁論術』2, 23)」という説得推論において、「神々ですら一切を知らない」という大

前提はわれわれ人間の持っている常識に属する。哲学的に吟味するならば、「すべてを取り仕切ることができるのが神である」から、「神が一切を知らない」という表現・考えは矛盾であるとプラトンはいうだろう。しかしアリストテレスはこうした表現・考えを否定することはなかった。むしろこうした表現・考えにこそ弁論の理論があると考えていた。説得推論はこのように常識を大前提としている。こうして常識を大前提としたうえで説得推論においては、われわれの常識が小前提として補われる必要がある。先の例でいえば、「神々は一切を知らない」という大前提にたいして、「人間は神々ほど能力がない」という小前提を推論する者自身が補う必要がある。この小前提を補うことで「人間がすべてを知ることが不可能である」という結論が導き出される。このように、説得推論には、大前提がわれわれの常識であり、われわれが常識から小前提を補う必要があるという特徴がある。この点にこそ、つまり常識を大前提にすること、そして推論においても常識を介入させてもよいこと、という点にこそ、弁論の理論が成立するのである。

④「たいていの場合」における推論という弁論の理論は、キケロやクインティリアヌスらの古代ローマ人の弁論術にも継承される、西洋中世においても引き続き継承される。

⑤弁論のこうした理論が改変されるのはバウムガルテン『美学』においてであり、これ以降古代ローマの弁論術は近代の美学芸術学へと変貌し吸収されることとなる。

(3) 本研究課題の中心をなす古代ローマ弁論術において最も重要な著作は、古代ローマ弁論術の集大成であるがクインティリアヌス『弁論家の教育』全12巻である。交付期間中に、全12巻中第3巻から第5巻までを邦訳・研究した。その成果は2009年3月に翻訳『弁論家の教育 2』(京都大学学術出版会)として世に問うた。全12巻中のうち一部とはいえ、この刊行によって、古代ローマの弁論術についてある程度の概観を与えることができた。

(4) 古代ローマ弁論術においても一つ重要な著作群は、キケロの『弁論家について』『発想論』『弁論家』『ブルトウス』『トピカ』である。このうちまだ邦訳のない『トピカ』を邦訳・研究した。その成果は残念ながら未発表である。

(5) 上記「3. 研究の方法」(3)で記したように、「弁論術研究会」での研究発表・共同討議の成果は、『古代ローマにおける弁論術の形成と発展 科学研究費補助金研究成果基盤研究(B) 研究成果報告書』として2010年3月にまとめた。その具体的な内容については先に記したとおりであるが、特記すべきは現代レトリック復興に関する萩原康一郎氏

の研究である。萩原氏によれば、現代のレトリック論は古代の弁論術を継承すると標榜するものの、実は古代の弁論術の誤解のうえに成立しているものであって、現代のレトリック論と古代の弁論術とは本質的に異なるというのである。その間の詳細については萩原氏の論文を参照していただきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ①渡辺浩司、制作学の原理、『古代ローマにおける弁論術の形成と発展 科学研究費補助金基盤研究(B) 研究成果報告書 研究代表者 渡辺浩司』、査読無、2010年、7-26頁。
- ②伊達立晶、プラトンの弁論術書『パイドロス』、『古代ローマにおける弁論術の形成と発展 科学研究費補助金基盤研究(B) 研究成果報告書 研究代表者 渡辺浩司』、査読無、2010年、27-49頁。
- ③田之頭一知、兼常清佐の「ピアニスト無用論」、『古代ローマにおける弁論術の形成と発展 科学研究費補助金基盤研究(B) 研究成果報告書 研究代表者 渡辺浩司』、査読無、2010年、100-115頁。
- ④渡辺浩司、プラトンとアリストテレスの音楽観、『芸術はどこから来てどこへ行くのか』大森淳史他編著、晃洋書房、査読無、2009年、302-318頁。
- ⑤田之頭一知、20世紀音楽における楽曲の終わりが持つ意味、『芸術はどこから来てどこへ行くのか』大森淳史他編著、晃洋書房、査読無、2009年、347-360頁。

[学会発表] (計5件)

- ①田之頭一知、武満徹における映画の位置、美学会西部会第269回研究発表会、2008年7月12日、立命館大学。
- ②渡辺浩司、説得推論と感情効果、美学会西部会第268回研究発表会、2008年6月7日、京都大学。
- ③伊達立晶、ボードレールのパリ万博評とその余波、第57回美学会全国大会、2006年10月8日、大阪大学。

[図書] (計2件)

- ①クインティリアヌス『弁論家の教育 2』森谷宇一、戸高和弘、渡辺浩司、伊達立晶訳、京都大学学術出版会、2009年、366頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

渡辺 浩司 (WATANABE KOJI)  
大阪大学・大学院文学研究科・助教  
研究者番号：50263182

### (2) 研究分担者

伊達 立晶 (DATE TATSUAKI)  
同志社大学・文学部・准教授  
研究者番号：30411052

### (3) 連携研究者

田之頭 一知 (TANOGASHIRA KAZUTOMO)  
大阪芸術大学・芸術学部・准教授  
研究者番号：40278560

### (4) 研究協力者

森谷 宇一 (MORITANI UICHI)  
大阪大学名誉教授  
研究者番号：70033181  
戸高 和弘 (TODAKA KAZUHIRO)  
大阪大学・非常勤講師  
研究者番号：60528214  
菊池 あずさ (KIKUCHI AZUSA)  
京都府立大学・非常勤講師  
研究者番号：なし  
石黒 義昭 (ISHIGURO YOSHIAKI)  
立命館大学・非常勤講師  
研究者番号：40522785  
萩原 康一郎 (HAGIWARA KOICHIRO)  
奈良芸術短期大学・非常勤講師  
研究者番号：なし  
吉田 俊一郎 (YOSHIDA SHUNICHIRO)  
東京大学・大学院生  
研究者番号：なし